



ワイン用ブドウ栽培に衛星データ システム開発に着手

ツイート

いいね! 66

シェア

産業機械製造の羽生田鉄工所（長野市）、システム開発のシステックス（同）、セラミックス部品など製造のアスザック（上高井郡高山村）は、人工衛星の観測データを活用し、ワイン用ブドウの栽培を効率化するシステムの開発に着手した。県内でワイン用ブドウの栽培が広がる中、熟練者の経験に頼らなくても適切に管理できるサービスの需要が高まると判断。ブドウ畑を衛星画像で捉え、生育状態を把握する実証実験を県内の畑で始めており、3年後の事業化を目指す。



サンクゼールのブドウ畑を撮影する無人走行車。衛星データと地上の写真などを組み合わせてブドウの状態を把握する

政府は人工衛星のデータを積極的に公開して活用を促す方針で、撮影画像や解析ソフトを原則無料で使えるデータのプラットフォーム（基盤）を構築している。こうしたデータを地域産業に役立てようと、長野商工会議所（長野市）の「長野宇宙利用産業研究会」が4月に発足。研究会のプロジェクトとして3社が開発に乗り出した。

衛星データの活用を図る各地の取り組みを支援する一般財団法人のリモート・センシング技術センター（東京）、宇宙システム開発利用推進機構（同）と連携。衛星のデータと地上で観測したデータを分析し、畑の状態を細かく把握して適切な手入れができるシステムを開発する。

自社栽培のブドウでワインを製造するサンクゼール（上水内郡飯綱町）とヴィラデストワイナリー（東御市）の畑で今夏に実験を開始。衛星の画像でブドウの葉が光を反射する強さを解析し、葉にどのくらい勢いがあるかを把握する。無料プラットフォームのデータでは、撮影の頻度や解像度が十分ではなかったため、米国企業から衛星の画像データを購入。葉の勢いの強弱の分布を把握できたという。

地上では、カメラを付けた無人走行車や小型無人機ドローンでブドウ畑の写真を定期的に撮影。温湿度、日照時間、降水量などを常時観測する。これらのデータを組み合わせてブドウの生育状態を確認し、農業を使うタイミングなどを見極める。サンクゼールの担当者は「畑の状態が面的に分かり、どこに手を入れたらいいか判断できる。熟練者でなくても栽培しやすくなる」と話す。

県内では、ワイナリーの開設が相次ぎ、ワイン用ブドウの栽培に乗り出す人も増えている。3社は今後、観測データを蓄積して適切な栽培管理につなげる手法を研究し、システムの商品化を目指す。無料プラットフォームの使い勝手が向上すれば、活用してコストを抑える。

羽生田鉄工所の羽生田豪太社長は「客観的なデータに基づいて管理できるサービスを提供し、栽培の拡大を後押しする。ブドウで手法が確立できれば、他の農産物にも対象を広げたい」としている。

(11月16日)